

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02673

研究課題名(和文) 教育思想史のメタヒストリー的研究

研究課題名(英文) Meta-historical Study on the History of Educational Ideas

研究代表者

相馬 伸一 (Sohma, Shinichi)

佛教大学・教育学部・教授

研究者番号：90268657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、欧米において19世紀に成立した教育思想史の歴史的再検討によって、教育思想史の可能性と課題を明らかにすることをめざした。教育思想史学会の平成29年から令和2年の大会においてコロキウムを企画し、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの教育思想史テキスト、教育思想史における主要概念としての自然及び自然主義、ペスタロッチの解釈の変容、教育思想史のアジアにおける受容の一事例としての清末・民初、ヘイドン・ホワイトのメタヒストリーの視点をとりあげ、有意義な討議を提供し、その成果を『近代教育フォーラム』に公表した。また、各メンバーが論文執筆や学会発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育思想史は、国民国家を支える公立学校の教員養成のために書かれ始めた。その記述は、歴史研究の進展からすれば多くの問題があるにもかかわらず、シエマ的なゆえの分かりやすさのために、かなりの部分が依然として私たちの教育認識の前提的な知識であり続けている。本研究は、具体的なテキストをとりあげ、教育学の通説が歴史的に形成され、いわゆるカノン化に至ったのかを考察した。この考察は、教職課程において必須とされている教育の理念・歴史・思想の学修のあり方を考察するために多くの示唆をもたらすものである。

研究成果の概要(英文)：This study aimed, through the historical reexamination, to clarify the possibilities and challenges of the history of educational ideas which was established in the 19th century when public schools were being institutionalized in Europe and the United States. We organized five colloquiums in the annual meetings of the History of Educational Thought Society, from 2017 to 2020, and dealt with (1) the representative texts of the history of educational ideas in the United States, the United Kingdom, Germany, and France, (2) the nature and naturalism as the main concepts in the history of educational ideas, (3) the transformation of Pestalozzi's interpretation, (4) the history of educational ideas in the Qing Dynasty and the Republic of China, as the example of the acceptance of the European-born history, and (5) metahistorical perspective by Hayden White. The colloquiums provided meaningful discussions, and the results appeared in the "Forum on Modern Education," Vol. 27 to Vol.30.

研究分野：教育思想史・教育哲学

キーワード：教育思想史 メタヒストリー 近代 歴史観 カノン化

1. 研究開始当初の背景

教育学における思想研究および思想史研究では、従来、本質主義的なテキスト読解が暗黙の前提とされていた。しかし、「言語論的転回」を経て、思想の意味とは、あるテキストについて、それをあつかった別のテキストが書かれる積み重ねのなかで、その都度生成されてきたととらえられるようになった。とくに、「古典」と称される思想家やそのテキストは、それぞれの時代や社会の問題意識に応じて、さまざまに読まれ、語られてきた。そうした語りのあるものはカノン（規範、正統的解釈）と見なされ、またあるものは異端と見なされてきた。「教育思想史」はそのようにして形成されてきたと考えられる。

こうしたなかで、教育哲学会や教育思想史学会では、教育に関わる言説への歴史的アプローチが検討されるようになった。2014年（平成26年）の教育哲学会の研究討議「『教育学の古典』はいかに創られ、機能してきたのか——教育哲学のメタヒストリー」では、教育学における「古典」がどのように形成され、どのような役割を果たしてきたのかに関して、問題提起が行われたが、私たちは、2015年（平成27年）には、この問題提起を引き継ぐかたちで、教育思想史学会コロキウム「教育思想史の「裏面」を問う——古典はどう読まれてこなかったのか——」を企画した。このコロキウムでは、コメニウス、ルソー、ヘルバルト、デューイを対象とし、従来の教育思想史という枠組みでは語られてこなかった古典的思想家の思想の多様な側面の一端に論及した。さらに、2016年（平成28年）には、同じく教育思想史学会コロキウムで、「教育思想史の誕生——ドイツと日本」と題して、19世紀後半以降の教育思想史叙述に大きな影響を与えたドイツの教育家ラウマーの『教育学史』の特質、および明治初期の日本における西洋教育思想史と当時の教師教育における実態をとりあげた。また、東アジア諸国においては、どのような西洋教育思想がどのように受容され、そのなかで教育思想（史）がどのように形成されてきたのかについて各国の特徴を明らかにすべく、PESA（オーストラレーシア教育哲学会）の2016年度年次大会で、日本・韓国・台湾の研究者によるミニシンポジウムを実施した。

こうして問題意識の深化を図るなかで、研究課題を焦点化して科学研究費に応募し、幸いにして採択をみるに至った。

2. 研究の目的

交付期間において研究組織の一部変更が生じ、また、2020年以降の新型コロナウイルスの感染拡大により、申請時に掲げた課題のすべてを実施するのが現実的ではないとの判断から、以下の3点を目的として、それらの検討に注力することとした。

(1) 教育思想史がテキストとしていかに成立し、その記述にどのような特質があるか

教育思想史テキストの嚆矢は、ドイツのラウマーおよびシュミットがそれぞれ著した『教育学史』であるといわれる。しかし、これらのテキストの成立過程や特質への検討は十分になされていない。ドイツにおける教育思想史テキストの登場と相前後して、フランスでは、ミシュレ、コンペーレ、そしてデュルケームが教育思想史テキストを著し、イギリスのブラウニング、アメリカのプロケット、モンローらが、これに追隨した。これらの動向や影響関係を検討する。

(2) 教育思想史のテキストにおける古典的思想家とそのテキスト受容の再検討

本研究では、教育思想史テキストにおいて必ずといってよいほどとりあげられる思想家として、とくに、コメニウス、ルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイに焦点を当て、それらのテキストが教育思想として「どのように読まれてきたか」と同時に「どのようには読まれてこなかったのか」を問い直す。ここにあげた思想家が、狭義の教育分野に影響を与えたのは事実であるにしても、彼らの思想はそれにとどまるものではなかった。本研究では、教育思想史において、これらの思想家たちに特権的な地位が付与され、彼らのテキストが、学校教育との関連を強調する形で読まれてきた様態を解明すると同時に、これらの思想家たちや彼らのテキストに対する今日の人文・社会科学研究分野における新たな理解を踏まえることによって、彼らの思想やテキストを教育学の文脈のなかでどのように読み直し新たな解釈を展開し得るかを探求し、教育思想史記述の新たな可能性を検討する。

(3) 教育思想史の方法論的視点の再検討

「1. 研究開始当初の背景」で示したように、従来の教育思想史記述では、本質主義的なテキスト読解が暗黙の前提とされていた。しかし、いわゆる「言語論的転回」を経て、思想の意味とは、あるテキストについて、それをあつかった別のテキストが書かれる積み重ねのなかで、思想のカノン化や異端化がなされてきたと考えられる。ヘイドン・ホワイトは、そうした問題を『メタヒストリー』で論じ、以来、歴史記述の問題はさまざまに論じられている。そうした議論を教育思想史記述においていかに引き受けられるかを検討する。

3. 研究の方法

教育思想史に限らず、人文・社会科学分野においては、個別的な研究の深化の一方で、その比較対照や総合が十分になされていないという問題がある。本研究は、個別的な研究テーマにとりくむわが国の中堅から若手の研究者の協働によって、この問題に対処することとした。個々のメンバーが、文献調査、文献読解、個人発表、個人研究にとりくむ一方、国内外での専門学会でコロキウム等の企画を実施し、オープンな討議の場を提供することとした。

4. 研究成果

本研究の主たる成果は、教育思想史学会の平成 29 年（2017 年）から令和 2 年（2020 年）の大会において継続して企画した以下の 5 つのコロキウムに集約される（上記の研究目的の項番を示す）。そのほか、各年度の主要な活動を示す。

平成 29（2017）年度：研究目的（1）および（2）

教育思想史学会第 27 回大会コロキウム「教育思想史の誕生（2） ペスタロッチと英米教育思想史」（2017 年 9 月 9 日、於：武庫川女子大学）

教育思想史における古典的思想家としてのペスタロッチの位置づけについて、近年の国内外の研究動向を踏まえて検討を行った。

教育思想史テキストの成立過程について、イギリスのブラウニングおよびアメリカのプロケットをとりあげ、その特質について論じた。

2017 年 12 月 3 日、オーストラリアのニューキャッスルで開催されたオーストラレーシア教育哲学会第 47 回で、コメニウスの自然概念が教育思想史でいかに語られたか、ルソーの自然主義が日本の教育学と哲学にいかに受容されたか、デューイのプラグマティズムと人間本性に関する議論をとりあげた。

単著 3 点、共著への寄稿 8 点、論文 11、学会発表 12 の実績があったが、そのうちでは、直近 5 年間に実施された全国の教員採用試験における教育思想史分野の出題の検討を網羅的に行った。このほか、ドイツ、イギリス、中国に文献調査を実施した。

平成 30（2018）年度：研究目的（1）および（3）

教育思想史学会第 28 回大会コロキウム「教育思想史の誕生（3） フランスにおける成立とドイツにおける展開」（2018 年 9 月 8 日 於：大阪大学吹田キャンパス）

コロキウムの前半では、長らく邦訳の出版が待たれていたヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』を教育思想史研究においていかに読解できるか問題提起を行った。

後半では、フランスにおける教育思想史の成立に関わって、ミシュレの『私たちの息子たち』を中心に取り上げた。その後、ドイツでの資料調査やインタビューに基づき、改革教育学（新教育）運動が展開しつつあった 20 世紀初頭のドイツにおける教育思想史の動向について検討した。

単著 3 点、共著への寄稿 7 点、論文 6（共著 2 を含む）、学会発表 10（国際学会 3、共同 3 を含む）という実績があがったが、研究代表者の相馬伸一（佛教大学）は、本課題の共同的取り組みから得た多くの示唆に立脚し、九州大学出版会学術図書刊行助成の選定を受け、『コメニウスの旅 生ける印刷術の四世紀』を出版した。この他、ドイツへの資料調査、ニュージーランドで開催されたオーストラレーシア教育哲学会への参加・発表が行われた。

令和元（2019）年度：研究目的（1）および（3）

教育思想史学会第 29 回大会コロキウム「教育思想史の誕生（4） フランスとアメリカにおける教育学的カノンの形成」（2019 年 9 月 13 日、於：立教大学池袋キャンパス）

コロキウムの前半では、ヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』に対するギンズブルグやフリードランダーらによる批判とそれに対するホワイトの応答等を通して、アウシュビッツ・ヒロシマ以降に（教育）思想史を問うことの意味を再考した。

後半では、フランスとアメリカにおける教育思想史記述のカノン形成について扱い、19 世紀末に小学校教師養成のために用いられたコンペーレの『教育学の歴史』を中心に、人物の選択やメタファーの使用といった思想史叙述の特質、スペンサー等の進化論的教育論の影響等の哲学的・思想的背景、教育の世俗化というフランスに特有な歴史的・社会的・制度的文脈との関連における教育思想史の位置について論じた。アメリカでは、19 世紀半ば文明史的特徴をもつ教育思想史テキストが成立していたが、20 世紀初頭にかけて、教職の専門職化に対応した教育思想史叙述の典型としてポール・モンローを取りあげ、当時の知的・社会的背景も視野に入れつつ、教育思想史叙述の特徴に論及した。

共著への寄稿 5 点、論文 11 点（共著 1 を含む）、学会発表 11（国際学会 1、共同 6 を含む）という実績があったが、研究代表者の相馬伸一（佛教大学）が、本研究の成果として 2018 年に発行した『コメニウスの旅 生ける印刷術の四世紀』が、第 16 回佛教大学学術賞（社会科学部門）を受賞した。このほか、アメリカへの資料調査が実施された。

令和 2（2020）年度：研究目的（1）および（2）

教育思想史学会第 30 回大会コロキウム「教育思想史と自然および自然主義」（2020 年 9 月 12

日～18日、オンライン開催)

教育思想史学会第30回大会コロキウム「教育思想家と歴史」(2020年9月12日～18日、オンライン開催)

前者では、教育学説の発展史として記述されてきた教育思想史において重視されてきた自然概念に焦点を当て、コメニウス、ルソー、ペスタロッチらによる自然への重視と、啓蒙主義の興隆を経て、それが科学的探究の方法に回収され、今日の教育一般に対する認識や教育政策の暗黙の前提となっている歴史的過程について、活発な討議を行った。

後者では、いわゆる教育思想家と見なされる人物がどのような歴史認識を有していたかをテーマとした。具体的には、カントを意識しつつ、教育学の科学化を構想したヘルバルトに見られる過渡期の時代における歴史認識、進歩主義教育を代表するデューイが残した教育史講義のシラバス、そして、欧米で書かれ始めた教育思想史が受容され、その「本土化」が試みられた清末・民初の中国をとりあげた。

単著4点、共著への寄稿4点、論文26(共著2を含む)、学会発表5(共同発表2を含む)という実績があがったが、交付最終年度から、新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化し、専門学会がオンライン開催に変更されたほか、国際学会はのきなみ中止や延期となり、国内外への調査出張も自粛を要請される事態となった。交付期間の1年延長が認められたが、この間も感染拡大が反復し、予定されていた国際学会がキャンセルとなるなど、その影響は予想外に大きかった。しかし、上記のコロキウムでは、いずれも事前の学習会を重ね、有意義な討議の場を提供することができた。

教育思想史は、教育という営みに対する私たちの理解の前提を構成する知識をもたらしており、教員養成教育の必須領域であり、教員採用試験では教育思想史の知識が問われることも多い。しかし、教員養成レベルのテキストで一般化している知識のなかには、今日の学術的理解からするとズレがあるものもある。それは、教育思想史の歴史的再検討が十分になされ、その知見が社会的に共有されるに至っていないことによる。また、教育思想史は、国民国家の形成過程において、多かれ少なかれその目的にかかわって構成された。このため、とくに、グローバル化、少子高齢化社会における生涯学習への期待、知識基盤社会の到来といった20世紀後半以降の社会変動が顧慮されていない記述にとどまっているという問題がある。本研究は、教育思想史をめぐるこうした課題の重要性を再認識させ、今日の社会的課題に応答しうる教育思想史の新たな可能性を示唆するものとなった。こうして、教員養成教育の一角を占める教育思想史をメタ的視点から再考するという本研究の大枠での目的を果たすことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計52件（うち査読付論文 21件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 41件）

1. 著者名 相馬伸一, 関根宏明, 綾井桜子, 岸本智典	4. 巻 29
2. 論文標題 教育思想史 の誕生 (4) - - フランスとアメリカにおける教育学的カノンの形成 - -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 148-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 32
2. 論文標題 戦前期日本におけるコメニウス言説再考3	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佛教大学教育学部論集	6. 最初と最後の頁 32-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 62-1
2. 論文標題 コメニウスのデカルト批判再考1 『機械工によって反駁されたデカルト並びにその自然哲学』 (1659) を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島修大論集	6. 最初と最後の頁 147-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15097/00003083	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 21
2. 論文標題 コメニウスのデカルト批判再考2: 『P. セラリウスの反論についての所見』 (1667) を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佛教大学教育学部学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 綾井桜子, 相馬伸一, 高宮正貴, 今井康雄	4. 巻 30
2. 論文標題 教育思想史と自然および自然主義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小山裕樹, 生澤繁樹, 日暮トモ子	4. 巻 30
2. 論文標題 教育思想家と歴史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 123-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 33
2. 論文標題 戦前期日本におけるコメニウス言説再考 4	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佛教大学教育学部論集	6. 最初と最後の頁 15-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 62(1)
2. 論文標題 翻訳・ヨハネス・コメニウス『P. セラリウスの反論についての所見』13~29節	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島修大論集	6. 最初と最後の頁 101-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高宮正貴	4. 巻 29
2. 論文標題 リベラルな教育思想における美学の問題 J.S.ミルにおける個性と教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20552/hets.29.0_25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 椋木香子	4. 巻 121
2. 論文標題 ケンブリッジ学派の方法論が切り開くペスタロッチ研究の展望と課題—ルソー政治思想研究者との対話を通して—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 140-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 30
2. 論文標題 思想史は私たちに何を教えるか?ククリック『アメリカ哲学史』翻訳の経験から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 185-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小山裕樹	4. 巻 29
2. 論文標題 書評「坂越正樹監修、丸山恭司・山名淳編著『教育的関係の解釈学』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 196-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 63(1)
2. 論文標題 翻訳・ヨハネス・コメニウス『P. セラリウスの反論についての所見』30～47節	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島修大論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一、下司晶、綾井桜子、河野桃子、尾崎博美	4. 巻 28
2. 論文標題 教育思想史 の誕生(3)フランスにおける成立とドイツにおける展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 100-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 31
2. 論文標題 戦前期日本におけるコメニウス言説再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佛教大学教育学部論集	6. 最初と最後の頁 33-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 19
2. 論文標題 戦前期日本におけるコメニウス言説再考2	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佛教大学教育学部学会紀要	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関根宏朗	4. 巻 28
2. 論文標題 同時代のテキストに向き合うことの困難と可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 60-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河野桃子	4. 巻 23
2. 論文標題 ホリスティックな知がもたらす道徳的発達の可能性 R.シュタイナーによる「一体となって知ること (Sich-Einswissen)」を手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ホリスティック教育/ケア研究	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 綾井桜子	4. 巻 28
2. 論文標題 「近代フランスにおける教養の揺らぎと再定位 技芸(arts)の習得から「知」の教育へ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 19
2. 論文標題 進歩主義教育批判としての新実在論--フレデリック・S・ブリードによる主題カリキュラム擁護の方略に着目して--	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 プロセス思想	6. 最初と最後の頁 144-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一 , 下司晶 , 椋木香子 , 高宮正貴 , 岸本智典 , 眞壁宏幹	4. 巻 27
2. 論文標題 教育思想史 の誕生(2)ペスタロッチと英米教育思想史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 118-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 27
2. 論文標題 コメニウスから考える教育政治	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 43-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 生澤繁樹	4. 巻 27
2. 論文標題 「未来」を考慮に入れること 真理と実在をめぐるプラグマティズムの経験論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 100-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一・下司晶・鈴木宏・日暮トモ子・尾崎博美・塩見剛一	4. 巻 26
2. 論文標題 <教育思想史>の誕生 日本とドイツ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『近代教育フォーラム』	6. 最初と最後の頁 117-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一・室井麗子・椋木香子・小山裕樹・生澤繁樹	4. 巻 58 2
2. 論文標題 教員採用試験における教職教養分野の特質と課題 教育思想史分野を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島修大論集	6. 最初と最後の頁 117 159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 26
2. 論文標題 コメニウスにおける宗教と教育	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『近代教育フォーラム』	6. 最初と最後の頁 100 106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相馬伸一	4. 巻 10
2. 論文標題 教職課程の再課程認定にどう対応するか? ~ 「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」の場合 ~	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『修大教職フォーラム』	6. 最初と最後の頁 10 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高宮正貴	4. 巻 15
2. 論文標題 ブラウニングの『教育理論史入門』における教育思想史叙述の意図について 「範例」としての教育思想史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『大阪体育大学健康福祉学部研究紀要』	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 1
2. 論文標題 教育史はいかにして教員養成に組み込まれたか キリスト教的価値の消失過程におけるライナス・ブ ロケット『教育の進歩と歴史』の意義	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『作新学院大学女子短期大学部研究紀要』	6. 最初と最後の頁 24 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 生澤繁樹	4. 巻 115
2. 論文標題 プラグマティズムは「教育」をどう問いなおしてきたか? 現代プラグマティズムが切り拓く問いの地平 を踏まえながら	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『教育哲学研究』	6. 最初と最後の頁 133-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 生澤繁樹	4. 巻 12
2. 論文標題 The Publicness of the Curriculum and the Ambiguity of the Shift to Participatory Politics: The Intersection of Politics and Education Regarding "Representation"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Educational Studies in Japan: International Yearbook	6. 最初と最後の頁 135-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計33件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 相馬伸一、関根宏朗、綾井桜子、岸本智典
2. 発表標題 教育思想史のメタヒストリー(4)
3. 学会等名 教育思想史学会第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高宮正貴
2. 発表標題 J.S.ミルの正義論と教育思想
3. 学会等名 日本イギリス理想主義学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高宮正貴
2. 発表標題 道徳性の概念と道徳教育：アリストテレス、カント、ミル、デューイの比較から
3. 学会等名 日本道徳教育学会第94回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野桃子、池田華子、津山直樹、福若真人
2. 発表標題 ホリスティックな「対話」の場における自己物語の語り直し 暮らしのなかのホリスティックなあり方に焦点づけて
3. 学会等名 日本ホリスティック教育/ケア学会 第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野桃子
2. 発表標題 ホリスティックな知がもたらす道徳的発達の可能性 R.シュタイナーによる「一体となって知ること (Sich-Einwissen)」を手がかりに
3. 学会等名 日本ホリスティック教育/ケア学会 第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Atsuhiko Yoshida, Hanako Ikeda, Yoko Okumoto, Mehaeng Sohn, Momoko Kono, Hiroyuki Oyama, Hiroe Kido
2. 発表標題 Holistic Education/Care Research in Japan -Focusing on the 2019 Conference Report
3. 学会等名 The 7th Roundtable Meeting of Asia-Pacific Network for Holistic Education
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相馬伸一、綾井桜子、河野桃子
2. 発表標題 教育思想史 の誕生(3) フランスにおける成立とドイツにおける展開
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相馬伸一
2. 発表標題 The Principle of Hope and Education according to J. A. Comenius
3. 学会等名 The International Network of Philosophers of Education (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生澤繁樹
2. 発表標題 Creating Inquiry-based Learning: Rereading and Recontextualizing of Dewey's Educational Thought
3. 学会等名 the 38th Annual International Seminar, International Society for Teacher Education (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生澤繁樹
2. 発表標題 ジョン・デューイと社会変革への教育 アメリカ革新主義の一断面
3. 学会等名 第52回アメリカ学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野桃子、曾我幸代、高橋和也、吉田敦彦、成田喜一郎
2. 発表標題 今ここからホリスティック教育/ケアの可能性を探る
3. 学会等名 2018年度日本ホリスティック教育/ケア学会 第2回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 綾井桜子
2. 発表標題 「近代フランスにおける教養の揺らぎと再定式化 技芸(arts)の習得から「知」の教育へ」
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相馬伸一・下司 晶・椋木京子・高宮正貴・岸本正典・真壁宏幹
2. 発表標題 教育思想史 の誕生（2） ベスタロッチと英米教育思想史
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 生澤繁樹
2. 発表標題 規範への抵抗としての規範の語り ポスト基礎付け主義と批判的教育の集合的記憶をめぐって
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 綾井桜子
2. 発表標題 『教養の揺らぎとフランス近代 知の教育をめぐる思想』
3. 学会等名 フランス教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 室井麗子
2. 発表標題 A Study on the Reception of Rousseau 's Naturalism in Japanese Educational Thought and Philosophy
3. 学会等名 The Philosophy of Education Society of Australasia
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 相馬伸一
2. 発表標題 How has the concept 'nature' in Comenius been discussed in the historical studies of educational ideas in Japan?
3. 学会等名 The Philosophy of Education Society of Australasia
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計16件

1. 著者名 ブルース・ククリック、大庭諒、入江哲朗、岩下弘史、岸本智典	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 474
3. 書名 アメリカ哲学史 一七二〇年から二〇〇〇年まで	

1. 著者名 相馬伸一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 404
3. 書名 コメニウスの旅 生ける印刷術 の四世紀	

1. 著者名 相馬伸一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 366
3. 書名 しょうせつ教育原論 202X	

1. 著者名 生澤繁樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 528
3. 書名 共同体による自己形成 教育と政治のプラグマティズムへ	

1. 著者名 尾崎博美、井藤元、岸本智典	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 ワークで学ぶ教育課程論	

1. 著者名 入江哲朗、大厩諒、岩下弘史、岸本智典	4. 発行年 2018年
2. 出版社 教育評論社	5. 総ページ数 271
3. 書名 ウィリアム・ジェームズのことば	

1. 著者名 相馬伸一	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 317
3. 書名 『ヨハネス・コメニウス 汎知学の光』	

1. 著者名 綾井桜子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 231
3. 書名 『教養の揺らぎとフランス近代 知の教育をめぐる思想』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	椋木 香子 (Mukugi Kyoko) (00520230)	宮崎大学・教育学部・教授 (17601)	
研究分担者	尾崎 博美 (Ozaki Hiromi) (10528590)	東洋英和女学院大学・人間科学部・准教授 (32718)	
研究分担者	河野 桃子 (Kono Momoko) (10710098)	信州大学・学術研究院総合人間科学系・講師 (13601)	
研究分担者	高宮 正貴 (Takamiya Masaki) (20707145)	大阪体育大学・教育学部・准教授 (34411)	
研究分担者	鈴木 宏 (Suzuki Hiroshi) (40631891)	上智大学・総合人間科学部・准教授 (32621)	
研究分担者	関根 宏朗 (Sekine Hiroaki) (50624384)	明治大学・文学部・専任准教授 (32682)	
研究分担者	岸本 智典 (Kishimoto Tomonori) (50757713)	昭和音楽大学・音楽学部・講師 (32716)	
研究分担者	小山 裕樹 (Oyama Yuki) (60755445)	聖心女子大学・現代教養学部・講師 (32631)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	綾井 桜子 (Ayai Sakurako) (70350189)	十文字学園女子大学・教育人文学部・准教授 (32415)	
研究分担者	生澤 繁樹 (Izawa Shigeki) (70460623)	名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	日暮 トモ子 (Higurashi Tomoko) (70564904)	目白大学・人間学部・准教授 (32414)	
研究分担者	下司 晶 (Geshi Akira) (00401787)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	室井 麗子 (Muroi Reiko) (40552857)	岩手大学・教育学部・准教授 (11201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関